

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520174

研究課題名(和文) 実証分析による20世紀の交響楽団におけるレパートリー形成とその要因の国際比較研究

研究課題名(英文) A cross-cultural empirical analysis of the formation of orchestral repertoires and its factors in the twentieth century

研究代表者

井上 登喜子 (INOUE, Tokiko)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・助教

研究者番号：90361815

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は20世紀を通じたオーケストラのレパートリー形成とその要因についての実証研究である。日本、ドイツ、米国のシンフォニー・オーケストラの定期演奏会のレパートリーを主要サンプルとして、データベースの構築と仮説検証により、レパートリーの集中度と新規レパートリー導入に関する制度的要因ならびに指揮者要因について分析を行った結果、レパートリーの固定化に関しては国や団体を越えた共通性が、レパートリーの多様化に関してはその要因に差異がみられることが確認された。

研究成果の概要(英文)： This research aimed at understanding and comparing the formation of orchestral repertoires and their factors by empirically analyzing the repertoire development through regular concerts held in 20th century Japan, Germany, and the U.S. My findings indicate that the conformity of repertoires shows a similar tendency beyond countries and orchestras on the one hand, while different factors spur the introduction of new composers into orchestral repertoires between groups on the other hand.

研究分野：音楽学

キーワード：音楽学 音楽受容 レパートリー形成 データベース オーケストラ 国際比較 日本：ドイツ：米国  
実証研究

## 1. 研究開始当初の背景

西洋音楽の演奏レパートリーの形成に関して、長期にわたる大規模なデータと仮説検証という実証的手法を用いた研究は、国内の研究としては、研究代表者が初めて着手したものである。研究代表者は当該研究開始以前に、二度の科研費助成を得て、本研究分野の開拓に取り組んできた(2004-2006 年度科学研究費補助金若手研究(B)「近現代日本のオーケストラ活動のレパートリー形成に関する実証研究」、2008-2010 年度科学研究費補助金若手研究(B)「一九二〇、三〇年代日本の西洋音楽のレパートリー形成とメディアに関する実証研究」)。これらの研究では、昭和戦前期の日本におけるオーケストラ・レパートリーの形成要因を検証した結果、1920 年代から 1930 年代にかけて古典派音楽を核とするレパートリーの標準化が全国的に進むこと、また当時オーケストラの普及に貢献したアマチュアの学生オーケストラの曲目選択は、音楽雑誌や国産レコード等のメディアと強い影響関係を持つことを示してきた(井上 2010)。

一方、海外の研究では、米国のメジャー・オーケストラ 27 団体による 1842 年から 1969 年までの 86,500 演奏をサンプルとし、レパートリー形成要因を実証的に分析した(Dowd 2002)がある。

以上のように、一つの国・地域を対象とした実証的レパートリー研究の先行研究(井上 2010、Dowd 2002)はこれまでも蓄積があったが、異なる国・地域、文化を対象範囲として、レパートリー形成の傾向の個性や共通性とその要因を実証的に捉えようとする比較研究の取り組みは、本研究が初めて試みとなる。

## 2. 研究の目的

本研究は、20 世紀のオーケストラにおけるレパートリー形成の国際比較研究である。日本、ドイツ、米国という複数の異なる国・地域のオーケストラを対象とし、第一に、レパートリー・データの収集とデータベースの作成を通して、レパートリー形成の実態とその時代的推移を定量的に把握すること、第二に、レパートリー形成に影響を及ぼす要因について分析することを目的とする。

分析では、西洋社会ならびに非西洋社会におけるオーケストラ音楽のレパートリー形成過程での「少数の作曲家へのレパートリーの集中度」(所謂「正典化」作品への依存)と、「新規の作品の導入」に注目し、レパートリーの集中と分散を捉えるとともに、こうしたレパートリーの形成要因(時代、社会的変化、演奏能力、メディア、文化政策、指揮者等)を探究する。

複数の国・地域のサンプルに基づき、データベース構築と仮説検証という実証的手法による分析、さらにはサンプル間の比較分析を通して、異なる文化間のオーケストラ音楽

受容の個性と共通性を解明しようとするものである。

## 3. 研究の方法

### (1) レパートリー・データベースの構築

日本のオーケストラについては、小川昂編『新編日本の交響楽団演奏会記録』(1983 年、1992 年、2002 年発行)を主たるデータソースとして、本資料に含まれる日本の職業交響楽団 23 団体を検討した結果、設立年代が早く、本拠地や運営形態が様々な 8 団体をサンプルに選定し、各団体の創立から 2000 年までの定期演奏会のレパートリー・データベースを構築した。

海外のオーケストラについては、ドイツの「ベルリン・フィルハーモニック」と米国の「ニューヨーク・フィルハーモニック」をサンプルに選定し、両団体が公式ウェブサイト上で公開する演奏会記録(引用文献参照)をデータソースとして、演奏会情報ならびに演奏曲目のデータを取得し、分析のためのレパートリー・データベースを構築した。

### (2) レパートリー形成に関する分析

#### 要因分析

第一に、日本のオーケストラを対象とし、上述のレパートリー・データベースを用いて、オーケストラ・レパートリー形成の要因分析を行った。分析では、「くり返し演奏される少数作曲家作品への依存」と「新規作品の導入」を被説明変数とした。前者については、レパートリーの集中度や分布全体の不均等度を示す変数として、市場の集中度を測る指数「ハーフィンダール・ハーシュマン指数(HHI)」を援用し、後者については、新規にレパートリーに参入した作曲家数をこれにあてた。一方、説明変数としては、「演奏能力」、「運営形態」、「景気変動」、「文化政策」、「社会変化」を投入し、仮説検証を行った。

#### 指揮者の役割に関する分析

第二に、ドイツの「ベルリン・フィル」をサンプルとし、上述のレパートリー・データベースを用いて、レパートリー形成と指揮者の関連について分析を行った。レパートリーの形成には、分析で取り上げた社会的要因や制度的要因と並んで、レパートリーの選択に一定の影響をもつ「指揮者」という個人的要因も関与すると考えられる。本分析では、「ベルリン・フィル」の首席指揮者と客演指揮者の間の役割分担に注目し、仮説検証を行った。

#### レパートリーの固定化と多様化に関する分析

第三に、当該研究期間内に作成した日本、ドイツ、米国のオーケストラ・レパートリー・データベースを用いて、レパートリー形成における固定化と多様化の傾向の時代変化をサンプルごとに捉えるとともに、こうし

たレパートリーの固定化/多様化の傾向と指揮者役割との関連について、サンプル間の比較分析を行った。

#### 4. 研究成果

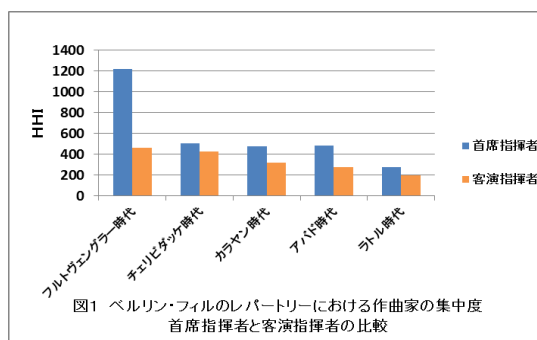
当該研究期間内の研究成果については、レパートリー形成に関する上記三種類の分析の結果として、以下の四点が挙げられる。

##### (1) 要因分析結果

日本のオーケストラをサンプルとしたレパートリー形成の要因分析の結果、説明変数のうち、「演奏能力」、「運営形態」、「文化政策」の各要因は、既存のレパートリーへの集中度を減少させ、新規レパートリーの参入を促すという結果を得たことから、レパートリー形成に影響を及ぼす社会的、制度的要因であることが確認された。

##### (2) 指揮者の役割に関する分析結果

ドイツの「ベルリン・フィル」のレパートリーをサンプルとして、指揮者という個人の役割に焦点をあてた本分析の結果、「ベルリン・フィル」では、首席/客演という指揮者の別による役割分担がレパートリー形成に明確に反映していること、ただし、その役割の差異は時代推移とともに減少傾向にあること(図1参照)、レパートリー形成の固定化には首席指揮者が、多様化には客演指揮者が関連することが確認された(井上2015)。



##### (3) レパートリーの多様化と指揮者役割に関する分析結果

さらに、「ベルリン・フィル」のレパートリー形成に見られる「多様化」の傾向と指揮者役割の関連について分析した結果、時代を追うごとに増加していく客演指揮者の出自の地域的多様性に伴い、レパートリーの地域的多様性(すなわち作曲家の地域的出自の多様性)も拡大すること、レパートリーの「新規作品導入」と「客演指揮者」、「同郷」、「年齢の低さ」の間には統計的に有意な関連が確認された(井上登喜子、「オーケストラのレパートリー形成における指揮者の役割」、2015、ワーキングペーパー[投稿中])。

##### (4) 国際比較

日本、ドイツ、米国のオーケストラ・レパートリーにおける固定化と多様化の傾向を分析した結果、いずれの国・団体においても、活動初期には「レパートリーの集中度」は高い値を示すが、時代を追うごとに徐々に減少し、一定の水準で安定する傾向にある点で共通していること、ただし、こうした変化の時期や度合(即ち「集中度」や「安定的水準」の値)は国、地域、運営形態によりばらつきがあることが確認された(図2、図3参照)。

また、レパートリーの固定化と多様化をめぐる指揮者役割に関する比較分析を行った結果、レパートリーの固定化/多様化と指揮者の関連は、国・団体ごとに差異がみられることが確認された(井上2016[刊行予定])。

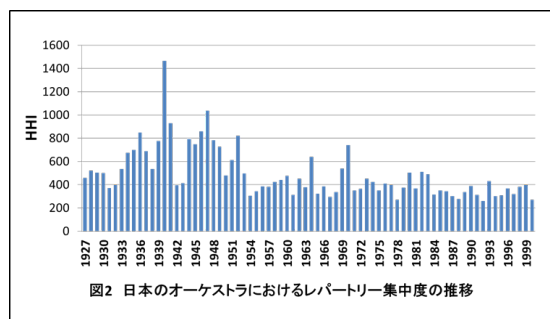


図2 日本のオーケストラにおけるレパートリー集中度の推移

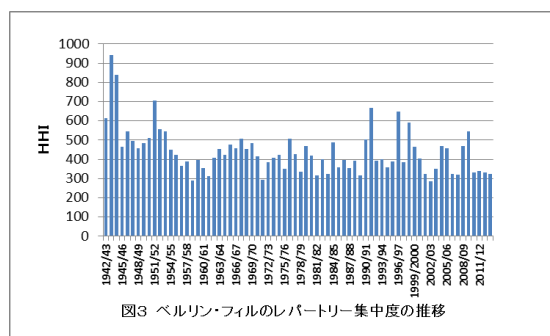


図3 ベルリン・フィルのレパートリー集中度の推移

##### < 引用文献 >

DOWD, Timothy J., et al. 2002 “Organizing the musical canon: the repertoires of major U.S. symphony orchestras, 1842 to 1969,” *Poetics* 30: 35-61.

井上 登喜子、2010、戦前日本における学生オーケストラの曲目選択に関する実証研究、音楽学、第55巻第2号、53-67。

「ベルリン・フィルハーモニー」  
<http://www.berliner-philharmoniker.de/en/concerts/calendar/archive/>

(2014年8月31日最終アクセス)

「ニューヨーク・フィルハーモニック」  
<http://archives.nyphil.org/performancehistory/#program>

(2015年3月31日最終アクセス)

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

井上 登喜子、2016、オーケストラのレパートリー形成の国際比較研究、お茶の水音楽論集、査読有、第18号(刊行確定)

井上 登喜子、2015、ベルリン・フィルのレパートリーの実証研究：首席/客演指揮者のレパートリー形成、人文科学研究、査読有、第11巻、149-163.  
(<http://hdl.handle.net/10083/57332>)

〔学会発表〕(計3件)

井上 登喜子、オーケストラのレパートリー形成における指揮者の役割、第31回民族芸術学会大会、2015年4月26日、新潟日報メディアシップ(新潟県・新潟市)

井上 登喜子、20世紀日本の交響楽団におけるレパートリー形成の要因分析、日本音楽学会東日本支部第20回定例研究会、2013年12月14日、国立音楽大学(東京都・立川市)

INOUE, Tokiko (井上 登喜子),  
European Classical Music in Non-Western Culture: Japanese Cultural Identity Seen in Repertoire Development in the 20<sup>th</sup> Century, The 19<sup>th</sup> Congress of the International Musicological Society(国際音楽学会第19回大会), 2012年7月6日, ローマ(イタリア)

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

井上 登喜子 (INOUE, Tokiko)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・助教

研究者番号：90361815

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし